

研究分野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研究課題名	尻屋磯根資源調査		
予算区分	公共		
調査研究実施年度・研究期間	S. 57 ~		
担当	高橋 進吾		
協力・分担関係	尻屋漁業協同組合、尻屋漁業研究会、むつ水産事務所		
<p><目的></p> <p>尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。</p> <p><試験研究方法></p> <p>2006年6月6日に、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計71調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。</p> <p>調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計106個については、生殖腺重量を測定し身入りを求めた。</p> <p><結果の概要・要約></p> <p>・2年目マコンブ</p> <p>2年目マコンブは、前年より高い密度で生育し、調査点平均では8.2本/m²となり、前々年(2004年)の約2倍となった。水深別にみると、10m以深では皆無となったが、2.5m、5mで20本/m²前後と多かった。ここ10ヶ年では1997年に次ぐ良い結果となり、2006年漁期のコンブ漁は前々年以上と考えられた。</p> <p>・1年目マコンブ</p> <p>1年目マコンブは、前年より高い密度で生育し、調査点平均では153.6本/m²となり、前年の約9倍となった。水深別にみると、2.5m、5mで360本/m²前後と多く、10mで90本/m²、15m、20mで各々2、5本/m²となった。海域別では北部の方が多い傾向がみられた。1984年の調査以降最も高い値となり、2007年の2年目マコンブは好漁が期待された。</p> <p>・キタムラサキウニ</p> <p>キタムラサキウニは、全体の80%に相当する57地点から採取され、平均の生息密度が2.9個/m²、現存量が270g/m²となった。調査点全体の86%から平均2.3個/m²、311g/m²の生息が確認された前年に比べ、個数は28%増加したものの、重量は13%減少した。</p> <p>ここ10年間の平均密度(2.2個/m²、327g/m²)には大きな変化がなく、依然高い密度で生息する状況が続いている。また、キタムラサキウニは100g/m²以上の密度で生息する場合、環境条件に</p>			

よってはマコンブが発生・生育しにくくなることが知られている。キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、引き続き、その生息状況を注視するとともに、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要がある。

〈主要成果の具体的なデータ〉

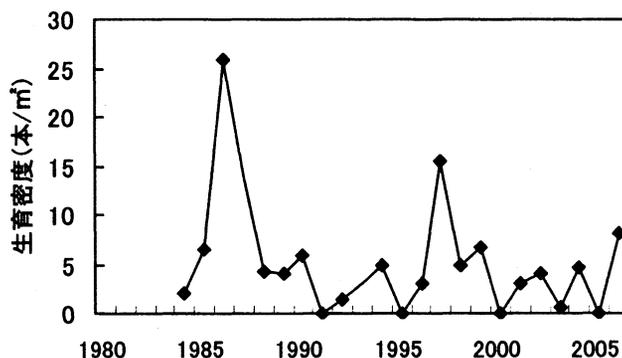
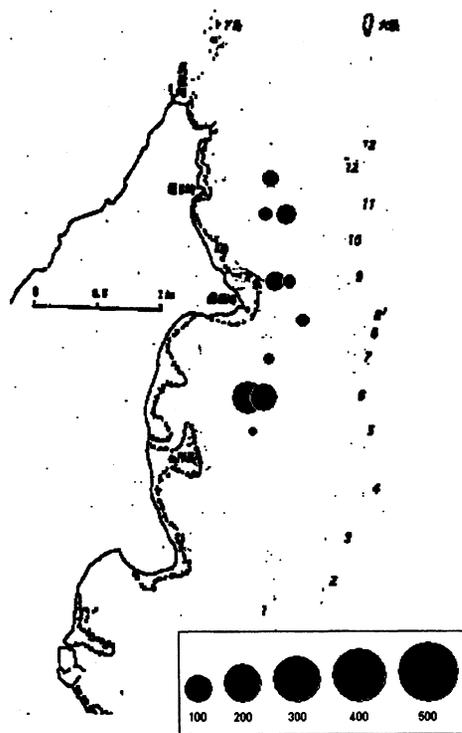


図2 2年目マコンブの生育密度の経年変化

図1 尻屋沿岸における2年目マコンブの生育密度(本/m²)

〈次年度の具体的な計画〉

6月に同様の調査を行う。

〈結果の発表・活用状況等〉

調査当日に尻屋漁業協同組合漁業研究会に対し調査結果概要を説明した。また、漁業協同組合に対しては翌月調査報告書を提出し、コンブ、ウニおよびアワビの生産計画や資源管理に反映させた。